
参観日…母の失禁

紅しだれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

参観日：母の失禁

【Nコード】

N1425C

【作者名】

紅しだれ

【あらすじ】

小学生の息子の参観日。非常識な担任や父兄達。そして授業中、母親が教室で粗相をしてしまう。それぞれの人間性が出てきて事態はエスカレートしていく。

(前書き)

この小説には、失禁、暴言、格闘の模写があります。

「グツツ…グツツ…」鰹ダシの味噌汁のいい匂いがキッチンを包んでいる。その横では、まな板でオクラを刻む音。擦り下ろしたシヨウガに由美オリジナルのダシ醤油を加える。

「よし、できた。ヒロ君とアツ君起こさなきゃ」

藤沢由美27歳、168cmのスレンダー体型。美人だが、少し垂れた目に、二重瞼は愛嬌を感じさせる。

由美に起こされ、寝惚け眼で洗面所に行ったのは、彼女の夫・浩（30歳）と一人息子・小学2年生の明人である。「いただきます」家族3人のいつもの風景だ。でも今日は由美と明人に少し緊張感がある。それもそのはず、今日は明人の通う小学校の参観日。午前中3、4時間目を使い、父兄参加型の工作の授業を行う。

由美は工作は余り得意ではなかったので、浩に、一緒に出て欲しいと頼んだが、月例会議があるので時間的に難しいとの事。由美だけで行く事になった。

「今日、大丈夫かなあ。」不安そうに由美が言う

「由美ちゃんは手先が器用だから、そう心配するなって」と浩はいつもの優しい口調でなだめる。

「お母さん、僕、工作得意だから心配いらないよ」明人の言葉に由美は少し気が楽になった。

「うんっ、足引っ張るような失敗しない様にするね」由美は可愛く笑った。しかし、この数時間後、工作とは違う、悲しい失敗をし、その可愛い笑顔が歪む事になるとは、誰も想像しえなかっただろう。食事が終わった。季節がら梨を出していたが、これは手付かずで残った。

「じゃ、行ってくるね」

「学校でね」

「ヒロ君、行ってらっしゃい、アツ君、後でね」由美は二人を送り

出した。

由美は参観日という事で、会社に頼んで午後出社の許可を貰っている。学校からそのまま行ける様に、上下白のジャケットとパンツで行く事になっていた。シャワーを浴び、いつもの様に自然体で化粧を済ませた。

「まだ、時間があるな。あつ、梨食べなかったんだ、夜になったらシナツちゃうから、私が食べちゃお」一口食べた。

「あつ、美味しい」

水みずしく、サッパリした二十世紀梨に、由美の手は、二口、三口と止まらなくなり、一玉を平らげてしまった。

由美は梨の水分でお腹が一杯になった。

「ごちそうさま、あつ、そろそろ準備しなきゃ」

歯磨きを済ませ、鏡で最終確認をした。

「うん、大丈夫っ！！」

会社用のバックを持ち、部屋を出て、エレベーターに向かった。

由美達家族は35階建てマンションの30階に住んでいる。

浩の収入だけでもやり繰り出来るが、由美も外で働きたいという希望があり、またお互い、家事を分担しているので、今の生活環境を維持出来ている。出会いは由美が短大1年、浩が大学4年だった。結婚は由美が社会に出てすぐ、浩が2年目の時だった。美男、美女で優しい夫は一流大学卒で一流企業勤務、と周りが羨む夫婦だ。殆んど振動も無くエレベーターは一階に着いた。小学校へは、子供の足で歩いて25分程。由美も歩いて行く。

18分程で小学校に着いた。明人の2年生の教室は一階だ。外の廊下には45人前後の父兄が待っていた。授業は二時間目が終わる少し前だった。由美もその端に並んだ。他の殆んどの母親が30代半ばなのに対し、27歳で更に3つ位若く見える由美は、際立って綺麗に見えた。

「キンコーン」授業終了のチャイムが鳴ると、父兄達は教室に入り、事前のプリントに書かれていた通り、予め、後に用意してあつ

たイスを手に取り、各々の子供の元に向かった。

「お母さんっ」

明人の声に由美はニツコリ笑って応えた。明人にとって綺麗で優しく、スタイルの良い母親は自慢だった。他の子も躊躇う事も無く口に出して

「明人のおばちゃん、綺麗だなあ」

「いいなあ」と、連発していた。

やがて授業開始のチャイムが鳴ると、担任の男性教諭・竹野から授業の説明があった。

「皆さん、こんチクワ!!!」

「……」

スベツた!!!

ものの見事にスベツた。溶け込もうとしたが逆に母親から

「はあっ?、これだから、家でも子供が言う事聞かねえんだよ」

「説明なんていいから、早く材料配れっ!!!」

「テメエ、チクワの材料にするぞっ」母親からの罵声が飛び交い

「わっ、分かりました」竹野は教材を前の席に人数分ずつ置いていた。

それぞれが作業に取り掛かった。

「お母さんっ、頑張ろうね」明人が由美に言った。だが由美は何か、考え事をしている感じで、答えなかった。それもそのはず。由美は急速に尿意を感じ始めていたのだ。

（どうしよっ、二時間も持たない。あっ、でも三時間目が終わったら休憩あるよね。それまでなんとか我慢しよ）「ねえ、お母さん？」

「あっ、う、うん、最初は外の寸法を計るのかな」

「うん、そうだよ」

由美は他の人に分からない様に足をピタッと、閉じた。20分、30分と立ち、由美と明人は、協力しあって、外側、引き出しを作っていた。しかし、由美の尿意は急激に、膀胱、尿道口を圧迫していた。下半身の感覚が殆んど無くなった。休憩まで後、3分の時だ

った。

「あゝゝゝっ、何やってるんですか」

担任の声が響いた。

（あゝっ、出ちゃったんだ）

由美は足元をみた。

（濡れて…ない）

声の方を見た。

驚いた顔で、7、8組の親子を見る竹野。

その親子達は、この授業のテーマ

「引き出し付きの小物入れ」とは、似ても似つかぬ、円柱系のゴミ入れや、テレビのキャラクター人形を作っていた。

外見は綺麗な服と、厚めの化粧で飾っている母親達。しかしまた、竹野に対する、理不尽な反抗が始まった。

「うちの子がこのキャラクター好きなんじゃ。なんか文句あんのか」
「なんでテメエに指図されて、作りたくねえもの、作らなきゃなんねえんだ。」

「やりたくもねえ事させられる子供が可哀想だ。なんならテメエの好きなチクワ型ゴミ箱作ったるか？あっ？」

その一帯は竹野に対する罵声で騒然となった。

「わっ、分かりました。それでは好きな物を作ってください。」

竹野はその場を治めるため、仕方なく認めた。キーンコーンその時、始業のチャイムが鳴った。由美は今の騒ぎでトイレに行く機会を失った。

「ねえお母さん、僕も好きなキャラクターを作っていない？」

明人が遠慮気味に言った。

「世の中にはルールがあるのよ。好き勝手な事をやっていると大人になって困るのよ。だから駄目よ…私も…もう駄目なの」

由美は悲しい表情で、言った。

「えっ！何が？」

明人は聞き返した。

「ううん、何でもないのよ」

（私はいい歳をした大人なんだ。絶対しない、おもらしなんて、しない…したくない）

由美は自分にいい聞かせた。しかし、もう限界だった。朝食後、食べた梨は、急激に膀胱へ尿を送り込んでいた。

（ここで粗相をしちゃって、あっ君がイジメられる事になったら可哀想）

由美は、恥ずかしかったが、担任の竹野の元に行った

「あの、すみません。トイレに行かせて下さい」
すると竹野は

「トイレは休み時間に済ませておくものでしょ？駄目です」

先程の凶暴な母親達に対する態度とは違う、強気な態度だ。竹野は大人しく、清楚な雰囲気の由美を泣かせてみたかった。女性に馬鹿にされ続け、40代に突入した恋愛経験のない竹野にとって、由美は、支配欲に駆られる妹的なタイプだった。

「分かりました」由美は一瞬、泣きそうな顔になった。それが更に竹野の感情を増幅させていった。

その声に周りの人達も由美が尿意を堪えている事に気が付いた。もう由美はじつとしてはいられなくなった。両足を交互に、上下へ揺り始めた。限界が近づいていた。

「ねえ、お母さん、もう一度先生に頼んでみたら？」

「う、うん、でも…大丈夫、お母さんは大人だから」

由美はニコツと笑った。でも、口元は少しひきつり、目は悲しみと絶望を物語っていた。授業終了15分前に工作はようやく完成した。

「はいっ、それでは皆さんの作品を前に出て発表してもらいます。

えゝでは、まず富田さんの作品から」

母親と子供が前に出て作品を作る時の苦労等を語っている。

次々と前に出て説明をしていく親子達。

（あゝ早く終わってよく、おしっこ漏れちゃうよく、でも、これって何の順番なの？席順でも、出席番号順でもないし…）

由美は切迫詰まる中、ふと思った。

そう、順番は竹野が勝手に決めていた。由美の様子を見て、限界直前まで前に出す魂胆だ。

由美と明人を含め残り5組となった。

（まだかな？よくし取りあえず5組全員前に出させよう）

そう思った竹野は前に5組全員、並んでもらい、い、順番に説明をしてもらった。由美は早めに説明を終わらせようと、先に並ぼうとしたが、竹野に制止され、最後に並ぶ様、促された。それぞれが作品について説明をしていたが勿論、説明等、竹野の耳には入ってこない。由美にしか意識は集中していなかった。

「アニメのキャラクター人形だ。何か文句あつか？」

あの親子の母親が言った。

「いえ、別にないです。素晴らしい出来だと思います」

竹野は適当に答えた。もう心臓はこれ以上ない位、鼓動を打っていた。いよいよ由美と明人の番が来た。

「難しかったのは、シワにならない様、千代紙を貼る所でした」

明人が言った。

「以上です」

そう由美が言って戻ろうとした時、竹野が

「待って、じゃあ今度はお母さんに質問しちやおかな。」（えっ、ちょ、ちょっと何で？）

由美は焦った。もう、あと少しの猶予も無かったからだ。「この千代紙の花柄、なんて名前の花かな？」

竹野が聞いてきた。

「かっ、寒椿だと思います」

由美は震える声で何とか答えた。

「よく分かりましたねえ、正解、正解。では次の質問ですが」

竹野の言いかけた時だった。

「いやいやいやいやあ」

由美の絶望と羞恥が相交じった微かな声が、明人と竹野の耳に聞こ

えてきた。

「あっ、あっ、あ~~~~」

竹野の歓喜に満ちているとも取れる叫び声。

「おかあ~~~~んっ」

明人の悲しみの叫び声。

それもそのはず。股間をギュッと押さえた由美の右手からは

ポタツ、ポタツ、ポタツと滴が落ち、光に反射してキラキラ輝いている。きつく閉じた足は、白いロングパンツに、ほのかな黄色の染みを作り、どんどん濡れて行く。

そして、その水流はやや曲げた膝部分から勢いよく飛び出し、ワックスの掛った教室の木製の床に

ビチャビチャビチャ~~~~

と、おしっこを飛散させ、落ちていった。

（イヤ~~~~お願い、

時間止まって~~~~）由美のそんな願いが叶う筈もなく、無情におしっこは尿道口から、物凄い勢いでビュービューで続けている。パンツの染みはどんどん広がり、床のおしっこ溜りを大きくしていった。

1分10秒に渡る失禁が終わった。まるで下半身だけ土砂降りの雨にあったかの様な、ビショビショ濡れの状態になっている。教室中の生徒と父兄が、まさかの光景に呆然とするなか

カシャツ、カシャツ

竹野がカメラでシャッターをきる音だけが響いていた。

「何やってんだー、テメエ、コノヤロー」

一人の母親が叫んだ。

それは竹野ではなく由美に対する言葉だった。

「このアマ、シヨンベン垂らしやがった」

「いい歳こいて恥ずかしくねえのか!!」

父兄達の暴言に呼応する様に子供達が

「大人のクセにおしっこおもらしするなんて信じられないー」

「汚ねえ、クソババアだなあ」

するとその母親が

「それを言うならションベンババアだ」

アーハッハッハッハッハッ

教室はそのツツコミで笑いに包まれた。

動画設定にしたカメラを由美に向け、机に置いた竹野は、由美のビシヨ濡れのロングパンツを脱がしに掛った。

「俺が脱がせて着替えさせてやる。おらっ!! 早く脱げ」

由美は必死に抵抗しながら叫んだ。

「イヤッお願い、辞めてッ、いやあッああ」

しかし誰も助ける者はいない。事の成り行きをニタニタしながら見ているだけだった。

「あッッッッ」

明人が少し離れた所でせつかく作った小物入れを、床に叩きつけ壊していた。明人が大好きな、いつも優しく綺麗な母親がおもらしをして、担任から嫌な事をされ、泣き叫んでいる。自分に目を向けさせる事で母親を助けたかった。その気持ちがあるな行動に駆り立てた。しかし、皆の視線はすぐ由美に戻った。明人はもう、どうする事も出来ず泣き出した。「由美ーーーーーッッ」

浩だ。浩が来た。月例会議が早く終わり、少しでも参加しようとしたのだった。

竹野の元に走り寄った浩は、ありったけの力で竹野を殴った。

「アイタタタタタ」

竹野は倒れ込んだ。しかし、すぐ立ち上がって、浩と掴み合いになった。身長170cmの竹野に対し20cm低い浩は、その身長差をモノともせず、掴み掛った。もつれ合い竹野の右肘が硝子窓に突っ込んだ。ガッシャーッーッーッー

硝子が割れ飛び散った。それでもまだ取っ組み合いは続いていた。

「何をやっとなるんじゃっ!!」

騒ぎを聞き付けた校長が怒鳴った。暴力行為があった為、警察が来て浩と竹野はパトカーで連行された。

後日、竹野は無罪で釈放された。パンツを脱がそうとした行為は

着替えさせる為、カメラ撮影はインシデントレポート作成の為、という言い分が通ったのだ。しかし、浩は逮捕された。殴った事に対する暴力行為と、竹野の右肘に6針の裂傷を負わせた事が、罪に問われた。実刑は免れたものの、会社をクビになった。

：1ヶ月が過ぎた

チュンチュン

スズメの鳴き声が響いた。朝日が差し込み寝床の浩の顔を照らした。六畳一間のアパート。これが今の住まいである。あの一件で浩は、一流の大企業の職も、高額な月給やボーナス、退職金、マンション、様々な物を失った。現在、零細会社の社員として13万の給料を貰っている。目を閉じた状態で浩は思っていた。

（あれで良かったんだ。俺は間違えてはいない）

浩は心の中で自分に言い聞かせた。その時

「ヒロ君、ご飯だよ」

すぐ側で声がした。

浩は布団から起き上がった。

そこには、朝食が乗った、小さな卓袱台の横に座っている、由美と明人の姿があった。

生活環境はガラリと変わった。でも

家族の絆は変わらなかった。由美の月給18万と浩の給料では、大変だった。しかし、掛け替えのない家族の温もりがあった。

朝食を食べ、歯を磨き、3人は玄関に並んだ。

「あっ君、行ってらっしゃい」

由美はそう言って明人の頭に軽く手を乗せた。

「うん、行ってくるよ」

明人が答えた。

「じゃっ、由美ちゃん、明人、行ってらっしゃい」

浩が言っていると、

「うん」

明人が答え、由美が

「ヒロ君も気を付けてねっ！」
そう言って、少し膝を曲げ浩の頬にキスをした。

< 完 >

(後書き)

不条理だとは思いますが、今の世の中、正直さが返って仇になる事もあります。最後は温かい感じにしてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1425c/>

参観日…母の失禁

2010年10月16日14時09分発行